

市民学習会：第57回戦後教育史を学ぶ
松本稔さんのライフヒストリーを聞く
スポーツとしての高校野球
—投票で選手を選ばせる—

〒371-0026 群馬県前橋市大手町 3-1-10 教育会館内

Tel & fax 027-235-8876

‘09. 4. 00 発行

群馬県高校教育研究所発行：編集/橋本寛文

4月4日(土)午後1時半より群馬県社会福祉総合センターで、標記のテーマで松

本稔さんのライフヒストリーをお伺いしました。松本さんは幼少からボール投げ遊びが大好きで、天井の節当てを楽しんでいたそうです。78年の春の甲子園大

会で史上初の「完全試合」を達成しましたが、後の人生は「おまけ」だといっています。その松本監督は、87年夏、決勝で前工を延長で破り中央高校を甲子園に導き、



さらに02年には母校前高を春の甲子園に連れて行っています。世に“松本マジック”

と言われていいますが、その背景にはマジックを必然ならしめる指導がありました。松本さん独自の野球哲学をお楽しみください。お忙しい方

は、5pの4.完全試合と私からお読みください。尚、正確さを期すため加筆・訂正、付記、最後に追録があります。

目	次
1. グローブを貰った……………2p	7. 野球はテクニックのスポーツ……………17p
2. 小学校チームをつくる……………4p	8. ミーティングは帽子をかぶったままで 20p
3. 一度も勝てなかった中学時代……………4p	9. 出場選手(背番号)は投票で決定 (中央・前高監督時代)……………20p
4. 完全試合と私……………5p	10. 高校野球を考える……………26p
5. 監督に文句が言える お前がキャプテン(筑波大時代)……………12p	11. 追 録……………37p
6. スポーツ心理学と「PM理論」……………14p	12. 感想文……………39p

司会: 57回目の“戦後教育史を学ぶ”を始めさせていただきます。本日お招きしました松本先生は皆さんご承知の通り、78年の春の甲子園大会で史上初の「完全試合」を達成した前高のピッチャーです。高校教師としてのスタートは中央高校で、87年夏、決勝で前工を延長で破り甲子園出場を果たしています。そのとき私は前工の野球部顧問をしていまして、松本マジックを見せ付けられた思いでした。02年には母校前高を春の甲子園に連れて行っています。本日は松本先生独自の「高校野球論」を伺えることを楽しみにしています。

1.グローブを貰った

平野: 東洋大学の平野でございます。これまで皆さんは松本先生のお話を伺う機会は多かったかもしれませんが、今回はインタビュー形式で伺うことによって、出来上がった松本先生のお話というよりは指導者としても松本稔がどういうふう形成されてきたかというところを中心に伺っていきたいと思っています。

まず、前半に教師になる前史の部分をお伺いしていきます。松本さんが純粋培養型で育った野球少年ではなかったということが、“松本野球”の一つの原点のように思われますが、中学時代には野球部に入るのをためらったともお聞きしましたが、野球に出会うまでの松本少年について、まず伺いたいと思います。最初の野

球との出会いと小学校時代のその他のスポーツとのかかわりなどからお話いただけますか。

松本: 皆さんこんにちは、松本です。今日は500円分の価値のある話は出来ないと思うのですが、(笑)最初に謝っておきたいと思います。

私の野球との出会いですが、何時ごろかはよく分からないのですが、そこらに転がっていたボールで遊んでいたのではないですかね。強いて記憶を遡れば、幼稚園のときに先生とゴムボールでキャッチボールをしてもらったということがあります。今ほどいろいろな遊びやスポーツのない時代でしたから、遊び＝野球という時代・地域だったのかもしれませんがね。幼稚園の頃ですから、なにか野球を一生懸命やるとか他の何かに熱中するとかの年齢ではありませんから…。

平野: 何時ごろ野球チームに入ったのですか。伊勢崎のご出身でしたね。

松本: そうです、大都会伊勢崎です。(笑)伊勢崎でも本庄に近い馬見塚町という緑っぱいの環境で育ちまして、小学校の三年生のときに町内の野球チームに入りました。当時は町内対抗みたいな感じで、町内チームが中心でした、ハイ。

平野: 年齢構成は？

松本: 六年生が中心で少しずつ五、四年生もいるという感じでした。三年生で入るのは意外と早かったように思えます。野球チームに入らないと友達と遊べないという事情もありましたね。で、街にイソ

ベースボールという運動具店がありまして、そこでユニフォームを買ってもらいましたが、背番号は「8」でした。ジャイアンツの高田選手の背番号ですね。ポジションは三塁手で4年生のときはピッチャーもやりました。

平野:三年生でもうポジションがもらえたのですか。

松本:上手かったのではないですか。(笑)

平野:いきなり上手かったというのは？

松本:幼稚園のときにゴムボールでキャッチボールをやりました。小学校一年生の時に近くの人が僕にグローブをくださいまして、初めてのグラブでしたからそれが嬉しくて、それに、近くに余り友達がいなかったの、家のブロック塀を相手に毎日キャッチボールをしていましたね。ブロック塀の一つの区画目がけて投げていましたね。その区画に投げないとボールがあっちこっち行ってしまいますので、真剣に投げますよね。車が目の前を通って行くんですけど、そのときは静かにやり過ごして、また投げ出す。考えてみれば、神経が発達する一番良いときにそういういいキャッチボール相手、友達が出来たということですね。それによって多分小学校三年でチームに入ったときにはある程度狙ったところに球が投げられていたと思いますね。<平野:基礎ができていたと>家の中でも柱目がけてキャッチボールしたり、寝っころがって天井の節にボールを当てたりして遊んでいましたね。<平野:それはブロック塀より難

しいですね>ガラスも何枚も割ったかなと…。

平野:ということで、三年はサードで「8番」。この背番号は自分で選んだのですか。

松本:そうです。私は今でも長島ファンなのですが、もしかしたら上級生にすでに「3」がいたのかもしれませんが、高田選手は俊足でもありましたので、それに憧れていたのかもしれませんが。

平野:そういえば、陸上もやってたそうで、足は早かったんですね。

松本:足は短いのですが、距離は短ければ短いほど速かったですね。50mはもう疲れてダメなのですが、野球は30mが速ければいいのですから。陸上は大会がありますので、学校代表でソフトボール投げや走り幅跳びに出ていました。

平野:四年生のときはもうピッチャーだったのですか。

松本:そうですね。エースではなかったと思うのですが、リリースで投げた記憶があります。

平野:で、他のスポーツもしていたわけですから、まるっきり野球少年だったわけでもなかったのですね。

松本:水泳は、夏に学校のプールでよく泳いでいました。クロールやバタフライをやったのですが、これが肩や肩甲骨を動かすのにとってもよかったと思いますね。ボールを投げるのに水泳がとて大きく役立ったなといま思っています。

2. 小学校チームをつくる(小学六年生)

平野:ところがチームについて六年生の時に困ったことが起こったとか…。

松本:ええ、六年生の時に人数が足りなくなって、町内チームが成立しなくなって大会に出られなくなってしまったのです。それで、町内関係なく仲の良い友達を募って、勝手にチームを作ってしまいました。名前は「クレージーナイン」(笑)。

平野:その即席チームで大会に出たわけですか。

松本:市の大会で決勝まで進み、延長で1対0で負けました。

平野:すごいですね。優秀なメンバーを集めたのですか。

松本:多分、集めましたね。子ども心でもこれだけのメンバーを集めれば勝てるという計算は立つじゃないですか。ですから、何とか勝てるチームをつくろうと努力したんじゃないかと思いますよ。

平野:すでにそういう策略家だったのですね。六年生の即席チームで市内大会決勝まで進んだというのに、中学に入ったときは野球部だけを考えていたわけではなかったと？

3. 一度も勝てなかった中学時代

松本:そうですね。六年生の陸上の記録会でハードルに出まして、県大会で5位になったのです。賞状を貰って嬉しかったのか、集団のスポーツでなくて自分が努

力して能力を発揮できれば評価される個人の種目の方がいいなと思ったんですね。でも、気がついたら野球部に入っていました。何でなのかはよく分からないのですが…。

平野:中学のチームはどういうチームだったのですか。

松本:伊勢崎第二中学校(現四中)の野球部でした。私が小六のときにとっても熱心な先生がいらっして、県大会で優勝しているのです。おそらくそれがあったのでしょね。そういうチームに入って野球をすればまた勝利できるのかなという気持ちがふつふつと湧いてきて、中学でも野球をやろうかと思ったのだと…、でも、入部したらその先生は転勤して、新しく顧問になった先生はほとんどグラウンドに出てこないということになってしまいました。

平野:で、活動はどうなったのですか。

松本:先生が熱心に指導くださらなかったこともあり、退部する生徒も出てだんだん部員が少なくなって年々弱くなりました。私が上級生になったときは、私とキャッチャー以外はみんな別の部を辞めてきた連中になってしまいました。あとで春日野部屋に入門した人もいました。

(笑) そういうことで、最後の一年間は市の大会で一度も勝てず、全て1回戦負けでした。

平野:それでも野球に対する情熱を失わなかったわけは？

松本:どうしてですかね。でも、自分は

ピッチャーだったので、自分が一生懸命に投げてよいピッチングをすれば勝ると信じていたような気がします。かっこよく言えば、「俺が勝たしてやる」といった気負いみたいな、傲慢な気持があったのかもしれませんが。

平野:個人競技のほうが向いているのではないかという気持をお持ちで、さらに入った野球部の成績も芳しくないとすれば、転向していてもおかしくないと思うのですが…。

松本:他の陸上部や水泳部に行っても大した成績は残せないという考えもあったのかもしれませんが。チームは勝てないけれど自分のピッチングはある程度思い通りにいっていたというのがありました。ですから、ある意味、ピッチャーとしての自分にはある程度自信を持っていたのかも知れませんね。

平野:なるほど、それで負け続けてもめげなかったのかも…。

松本:弱ければ自分が何とかしてやろうとか、そのほうがカッコいいとか、ヒーローになれるとか、そういう気持ちも少しはあったのかもしれませんがね。

平野:バッティングはどうだったですか。

松本:バッティングは好きでしたね。中三の担任の先生から、「松本、日曜日またヒットを打ったんだってな」といわれて喜んだ記憶があります。

平野:そういう意味では、個人競技が好きだったところがあるから、自分なりに納得のいくことが出来ていることで補われ

ていたのかもしれませんがね。ところで、その時点で、将来の夢として野球への思いみたいなものはどうだったんでしょうね。

松本:小学校六年のときの作文に、「将来の夢」というタイトルで将来はプロ野球選手に、というのを書いたんですよ。中学校になっては多分頑張ってもそこまでは無理だろうな…、そんな気持ちになっていたと思います。どうしてそうなったかは分からないんですがね。

4. 完全試合と私(前高時代)

平野:そういうことで高校へ入学するわけですけども、すぐに野球部に入られたのですか。

松本:おそらく、入学式のあと2週間くらい遅れて入部したと思います。

平野:その訳は？

松本:これは、折角電車通学になり、女子高生が同じ電車に乗る環境になったところで、坊主頭になるんじゃないかと、これはまずいと、これですね、最大の理由は。(大笑)で、そろそろ入らなければまずいというところまで引き延ばしました、ハイ。

平野:それで決断したのは…。

松本:もう一人伊勢崎から野球をやろうと欲していたのがいたものですから、二人で決断して職員室に行きまして、野球部の部長の先生に入りたいたいんですけどという話をしました。その方はとても優しい先生だったんですけど、前部長が

皮肉屋で「君たちどこから来てるんだ。伊勢崎？そういえば最近伊勢崎から来て続けているヤツはいないな。タイヘンだ。」と後ろから言ったのです。そうかなとも思ったのですが、一応入らないと分からないわけで、「それでも入ってみます」といって始めました。

平野:入部したチームはどうだったのですか。

松本:私は勉強は余りできなかったので、



勉強半分野球半分くらいの生活かなと思って入ったのですが、練習に休みはありませんし、上級生に厳しい人がいたりして、こんなはずじゃなかったと思いながらしばらく過ごしたですね。チームのレベルはちょうど力が上がっているところで、入部してすぐに春の大会がありまして、県で優勝して関東大会にも行かしていただきました。

平野:そのときは試合には出してもらえたのですか。

松本:2週間くらい遅れての入部でしたので…、でも春の大会の最後くらいのところベンチには入れてもらっていました。水戸の関東大会ではリリースに備えてブルペンで投げていたという記憶があ

ります。

平野:もうピッチャーとして評価されていたわけですね。

松本:うーん、どうなんでしょうね。他にあまりピッチャーがいなかったのかもしれないですね。

平野:そこまでいっていたので、甲子園は視野に入っていたのですか。

松本:いや、あまり入っていないですね。いけるはずがないよね、この学校じゃ、

と思って始めましたね。

平野:チームの雰囲気もそうでしたか。

松本:いや、先輩たちの中にとっても能力の高い選手がいましたから上手くすればというのはありました。でも、甲子園というのは自分では経験していない世界だったので、とてつもなくレベルの高い世界の高校野球という気持ちがしていたものから…頑張っても届かないという気持ちがどこかにいつもあったように思います、ハイ。

平野:それが変わってきたのはどの辺りからですか。

松本:しばらくは変わらなかったと思います。自分らが上級生になって高二の秋、地元の敷島球場で関東大会があって、そ

こで準優勝できたのですが、そのときに初めてですよね。女子高生がたくさん応援しに来てくれて勝てたのですが…(笑)、エネルギーの源はそこですね。

平野:準優勝ですから当然推薦で出場できると、

松本:そうですね。選ばれるだろうと思いました。

平野:そういうことで皆さんが良くご存知の甲子園の舞台が訪れるわけです。出ることになって気持はだいぶ変わりましたか。

松本:嬉しさ半分、不安・恐怖半分ですね。みんなが目指す甲子園ですから当然嬉しいんですけども、全国放送ですからあそこで恥は掻きたくないし、自分たちはそんなに強くないと思っていましたから、大敗するのはみっともないという不安・恐怖ですね。半分半分でした。

平野:実際に乗り込んでみてどうでしたか。

松本:最初に甲子園球場に足を踏み入れたのは公開練習のときなのですが、僕はその瞬間、「おお、思ったより小さいな」と感じました。テレビを見ていてすり鉢状のアルプススタンドのある大甲子園、でっかい球場と想像していましたから、意外さに驚きました。甲子園から帰ってきて作文に「ああ、こんなものか！甲子園は」などと書いていますからね。そういった意味では、ここなら投げられるよねという気持がありましたね。

平野:実際に試合が始まってみてどうで

したか。

松本:始まってみても驚くほど調子が良くて。1年間に3日くらいすごく調子の良い日があるんですが、たまたまその日にぶつかったんですね。ホントになんて運がいいんだという感じ。甲子園はマウンドの傾斜がとてもうまくできていて、ホームプレートまで凄く近く感じられたのです。ハイ。調子が良かったのもあるのかもしれませんが。それで、とっても気持ちよく投げられました。それに、審判の人がとっても良い方で、ストライクゾーンがこんなに広いんです。(笑) えっ、そこもストライクを取ってくれるの？というのがありまして、ホントに気持ちよかったです。だから緒戦は不安などもあるものですが、まあ、いいボールが投げられたので、これならいけるかもしれないと思いましたね。この試合に限ってはあがることは全くありませんでした。応援の方々もスタンドにいっぱい来て下さったんですが、まあ、これが最初で最後だから観に行つてやるかという感じで、勝利は皆さんあまり期待していないだろうなと思って、1試合終われば皆さん満足して帰ってくれるだろうと考えていましたから、全然緊張とかありませんでした。勿論、良い緊張感はありましたけれど緊張しすぎることはありませんでしたね。

平野:いけそうだと分かってからも変わらなりましたか。

松本:それは変わらないですね。あの、

出ること自体が“グリコのおまけ”みたいなものでしたから、(笑) そのつもりでした、ハイ。でも、最後は勝てると思ってないのが勝てそうになったので、多少より緊張して投げた感じはしますが。

平野:完全試合はどの辺りから意識し始めましたか。

松本:最初は気がつかないといいますか、「完全試合」という4文字はなかったのです。そういう試合は見たことも聞いたこともなかったですから。ノーヒットノーランは知っていました。あれ、その上に完全試合っていうのがあるよね、確か、と思ったのが、7回くらいでしたかね。

平野:ノーヒットノーランだって凄いことですからね。

松本:そうですね、ハイ。

平野:当然、チームメイトは意識しますよね。

松本:いやあ、みんな…、記録はどうでもよかったんですよ、多分。

平野:そういう意味では無心にやっていたという感じですかね。

松本:そうですね。

平野:でも回が押し詰まってくれば意識せざるを得ませんよね。

松本:ただ、なんていうんでしょうか、あまり野球のこととか記録のこととか知らなかつたものですから、今まで3、4人はやったことがあるだろうなと思っていたのです。終わってみたら初めてだったのでびっくりしたくらいでした。

平野:ベンチでは中継などは聞くのです

か。

松本:いや、それはありません。スタンドの方のワーとかキャーとかがちょっと分かるくらいです。

平野:そういう意味では変な雑音は聞こえてこないんですね。

松本:はい、集中は出来ました。

平野:それで、最初は誰が口に出したのですか。

松本:誰も出しませんでしたね。出さないほうがいいってみんな感じ取っていたのでしょね。

平野:最後までそのことには触れずに…

松本:そのときはノーヒットノーランだとか「完全」という言葉は禁句だと…監督も部長もおそらくそう思っていたのではないのでしょうか。

平野:無理に触れないでおこうとすることで反ってビリビリしちゃうことはなかったですか。

松本:そうですね、でもさっきもいいましたけど、記録はどうでもいいんですよ。勝てるかどうかが大問題で、

平野:だから、かえっていらぬ緊張はしないで済んだわけですね。

松本:はい。1点しかとっていませんから、ランナーを出すわけにも行かず、そういうことだったんですね。記録のことをあまり知らなくてよかったと思っています。知ってたらきっとダメだったと思います。ひとり、野球オタク見たいな佐久間という1塁手がいたのですが、彼は知っていたかどうか、まだ聞いていませ

んけれど。

平野:そういうことで終わった後は大変だったと思うのですが…

松本:そうですね、終わった後は自分中心に日本が回っているなという自覚がありましたね。(大笑)

平野:具体的にはなにがあったのですか。次の試合があるからお祭り騒ぎなどしてられませんよね。

松本:高校野球はあまりお祭り騒ぎをやってはいけないような雰囲気を持っています。でも、試合が終わってアルプススタンドに挨拶のために走って行っただけですが、礼をした途端にカメラマンがたくさん集まってきて、自分が向きを変えるたびにゾロゾロ一緒に向きが変わるとい

う世界でしたね。球場から宿舍までの帰りのバス乗り場までガードマンがついて通路を作らないと通

れない状態でした。

平野:マスコミの追っかけが凄かったのではないですか。

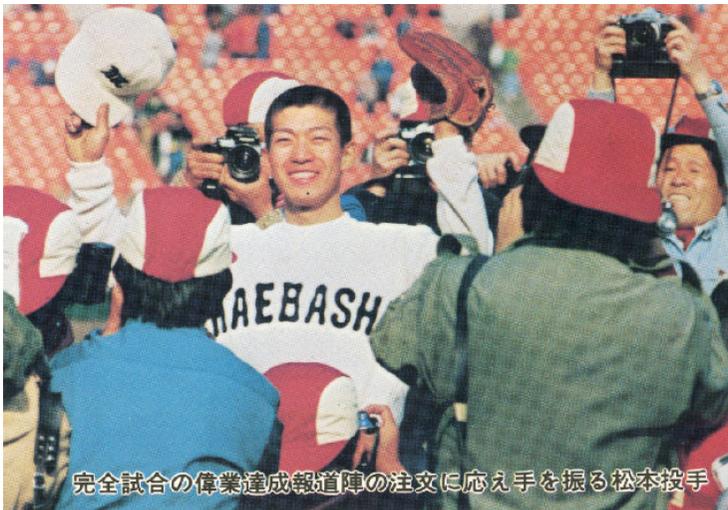
松本:帰りのバスの前に集まっていたね。主催者の記者やカメラマンはバスの中まで入ってきていましたね。宿舍前

もいっぱいでした。その日は木曜日だったのです。みなさん、覚えていらっしゃるかどうか分かりませんが、久米宏と黒柳徹子が「ザ・ベストテン」という歌番組をやっていたのです。僕たちは二階へ上がってテレビを見ようということで見ただけですが、番組の冒頭で二人が両サイドから出てきて、久米さんが「黒柳さん、今日は高校野球ですごくいいことがあったんですよ。」というのをみんなで「うおおお」って、(笑)聞いたことを覚えています。

平野:1回戦をそういう勝ち方をしてしまいますと、次の試合にはプレッシャーがかかりますよね。

松本:そうですね。次の試合は3日後くら

いでしたが、自分では別に意識はしていないつもりだったのですが、翌日から自分たちのことが新聞やテレビで大きく取り上げ



完全試合の偉業達成報道陣の注文に応え手を振る松本投手

られましたから、動けばすぐにマスコミをついてきますし、そういうことでマウンドに立ったときには人生初めて、おっ、これが“あがり”ってヤツか、なんていうのを経験しました。

平野:あがらない性格なんですか。

松本:基本的にはそれほどあがりません。でもそのときは、マウンドに上がった瞬間、頭はクリアでよく分かっているのですが、身体がいうことを利かない、地に足が着かないというのは正にこのことをいうのですかね。足の筋肉に力が入らない。そんなことで貴重な経験をしました。一応ピッチング練習を始めるのですが、前回よりは肩の調子が良くなって、身体もそんなことなので、スピードもコントロールも緒戦ほどではなかったですね。そんなことで0対14で負けました。

平野:思い通り行かなかった、その落差の大きさへの周りの反響はどうだったのですか。

松本:あつ、やっぱりそんなものね、という感じですかね。自分たちもそう思っていました。緒戦は上手く行きすぎちゃったから今回でちょうどかなって。でも、考えてみると、この数日で天国と地獄の両方を味わったというのが、貴重な経験で、ハイ。地獄も見られて良かったという感じです。

[スタッフ註「YOU TUBE」より実況放送]

1978年選抜高校野球 前橋 松本投手完全試合の瞬間

<ナレーション>甲子園は沢山のヒーローを生み出しました。

<画面テロップ：昭和53年3月30日>

<画面：第50回大会（昭和53年）松本稔（前橋高）>

<実況>打者26人、全開、パーフェクトまであと一人。淡々と投げる前橋高校のエース松本、はたして胸中や…

<画面：完全試合まであと1球>

<実況>あまりにも淡々としております。代打の時田に第1球、初球打った！ピッチャーゴロ、ピッチャーゴロ。とった！アウト！

<画面：史上初の大会記録通算1019試合目>

<インタビュー>

松本：ええと、まず一勝、チーム全体が出来たということでもとても嬉しいです。

アナ：ずいぶん優等生の答えが返ってきたけども、史上初のパーフェクトなんだよね。

松本：あつ、そうですか。

アナ：パーフェクトは高校野球では夏もそして春もないんだよ。

松本：ああ、そうですか。

アナ：淡々としてますね。

松本：ええ、あまり、なんというか実感、まだ湧いてこないですから。

アナ：今日のピッチング、自分では最高？

松本：ウーン、最高…？どうですか、わかんないですけど、この3日前ころはピッチングは全然ダメだったものですから、2日前ころになって急にちょっと調子が出てきたものですから、それで、まず勝てたことが一番嬉しいです。

平野:そういうことで春が終わって、その後夏季大会もあるわけですから。それについては…、

松本:選抜から帰って、朝、電車に乗れば女子高生がこちらに注目してくれるし、しかし、〈平野:期待通りだったのですね〉坊主だったのであまり見られたくないし、複雑な心境でした。夏の甲子園は最後ですし、大目標でしたのでそれを目指して3ヶ月間取組みました。春季県大会は決勝で敗れましたが、関東大会も決勝までいきましたから、選抜の1回戦に完全試合で勝てたことが、まんざらまぐれではなかったことが証明できて嬉しかったですね。で、夏に向かっていくのですが、みっともないところを見せられない多少のプレッシャーもありましたし、やはり高校野球をやっていると、6月ごろになると心身ともに疲れるのです。僕はあまりエネルギーに溢れている男ではないのですぐ疲れたり、怠け者なので6月ぐらいは「ああ、今日もまた野球か」みたいな気持ちが出てきて、午後の授業は寝てしまうことが多かったのですが、チャイムが鳴って目覚めると「また野球ね、きょうも」(笑)と思う日を何日か過ごしましたね。

平野:7月の予選を目の前にしてそういう状態だったのですか。

松本:先生方には申し訳ないことをしましたね。

平野:でも、そういう雰囲気は見せはしなかったんでしょ。

松本:それが、見せちゃうんですよ、僕は。でも、周りに悪影響を及ぼすのはまずいので、いつもグラウンドの隅で独りで練習

をやっている振りをしながら自分で休んでいた…。その点ピッチャーはいいですね、別行動させてもらえますから。

平野:自分ひとりでコツコツと調整しているという…

松本:準備運動・柔軟・ストレッチをしていると見せかけて実は休んでいたりして…。

平野:それで夏の予選が始まりました。

松本:夏は最後の大会でしたから、多少の注目を浴びていたこともありまして、緒戦は高崎の城南球場でありましたが、人生で二番目の緊張を体験しました。

平野:それはどうしてですか。

松本:負ければ最後の年は終わってしまいますよね。それと、周りの人が松本がどういうピッチングをするか、ある意味注目・期待しているように思えたので、それに応えられるかどうかという不安があったと思います。で、緒戦は何とかクリアしたのですが、準決勝まで行ったのですが、思うように行かず、前工に敗れました。

平野:今度はプレッシャーを受け続けたということですか。

松本:それはありましたね。こういう性格なので、もう一度行ったからいいよね、見たいな気持ちも(大笑)。ですから行ったり来たりの心境ですかね。応援して下さる人のためにも最後は行きたいという気持ちもありましたしね。

平野:結構めげない性格なんですね。

松本:ホントにいいように解釈するとこ

ろがありますんで、ハイ。

平野:で、先ほど中学時代にプロ野球は無理かなという話がありましたが、大学進学を控えて進路をどのように考えていましたか。

松本:高一のときに担任の先生から進路希望調査表を渡されたのですが、そこには第1希望一橋大学法学部と書いているのです。弁護士にでもなろうかと思ってたのですかね。担任の先生との面談で「いかなものでしょう」と聞いたら、ウンと10秒くらい唸っていましたが、「これから頑張れば…ウン、大丈夫かもしれないね」と言っていました。おそらくダメだよと思いながらもそういつてくれたのだと思います。一応そういう希望があったのですが、成績はもう下のほうですし、赤点がいくつかあって辛かったです。指されても分からなくて立ってなさいみたいな感じでね。弁護士、法学部は無理だと。<平野:そう思ったのはいつごろ?>おそらく、高校二年生の時には日本史か世界史で赤点を取ったのです。実は、中学までは「社会科」には自信があったのですが、やはりそんな簡単なものじゃないということに気づかされました。それで、どうしようかということで、僕は前高という学校の雰囲気が好きで、先生方もいろんな先生がいて、多分今考えると先生方は大変だったと思うのですが、でも、生徒から見た教員は皆さん楽しそうな感じがしたんです。(大笑)しかも楽しそうにさえ見えました。放課後には

顧問の先生はグラウンドに来てくれて、一緒に投げたり打ったり、時には走ったりしてくださるわけですね。こうやって人生を終わるのもこれはこれで良いかもしれない(爆笑)。それで、教師だね、と多分どこかで思うようになりました。最初は社会科の教師になろうと思っていました。教壇で歴史か何かを教えて、放課後になったらグラウンドにいて生徒と一緒に身体を動かすのがいいんじゃないか、と考えたんですね。ところが、赤点を取ってしまったので…。

平野:で、筑波大学の体育専門学群に推薦入学で進んだわけですか。

松本:家は出たかったので群馬を離れたい、教師になりたいということで「赤本」で調べたら学芸大は50何%が女子学生なのですね。

平野:元々女子師範でしたからね。

松本:やっぱりそうですか。間違えましたかね。それから筑波もいいなと思いました。教師になって野球の指導をしたいと考えていましたので、筑波大にも野球部があるので、そこにしました。

5. 監督に文句が言える

お前がキャプテン(筑波大時代)

平野:大学の方でも松本さんが来られるというので待ち構えていたと思うのですが。

松本:でも、生意気な後輩が入ってくるのは嫌だったんでしょうね、合宿がすぐあ

って行ったのですが、僕は気軽に先輩と話ただけでしたのに「松本、お前は生意気だ！」といきなり言われましたね。後輩から先輩に向かって口を聞くととはどのようなのでしょうか、そんな古風な先輩もいました、ハイ。岩手の盛岡一高のバンカラ先輩でした。今でも憎んでいますけど（大笑）。

平野:大学時代の野球生活はどうでしたか。選手としてと将来の指導者としての学びの両方があったと思うのですが。

松本:筑波大ですから、多くの学生が教員になってそれぞれ地方の指導者になるわけですから、僕はあそこに行けばとても素晴らしいものが得られるのだらうと思っていたのです。でも、こと野球に関してはそうでもなかったんですよ。それはとても残念なことでした。まず一つは、監督から3万人収容の野球場が出来ると聞かされていました。しかし、実際には長方形のグラウンドがあるだけで、ようやく三年生のときに出来たのですが、100人くらいの観客席があるだけでした。二つ目は、監督さんもそれほど野球のテクニックに秀でていませんでした。私は野球はテクニックのスポーツだと思っているので、そういう部分を吸収したかったんです。あまりそういうところに関心がないとか、あるいはそういうことを教えてくれないとか、とても残念でした。

平野:それは、監督の専門性が違っていたということですか。

松本:いえ、旧教育大の野球部のOBで

す。あるとき、別のOBの方にお会いする機会があったのですが、「ああ、あいつは…」と言っていましたから（笑）。

平野:ところで松本さんは何を専攻なさったのですか。

松本:勉強の方は「コーチング学」を三、四年で専攻しました。コーチング論というのは何でもコーチング論の範疇に入るんですよね。栄養のことだってそうですし、野球の技術的なこともそうですから、あまりに広すぎてこれを専攻しましたといえるのはなかったですね。つまり、言葉を変えれば遊んじやったということなんですけどね。（笑）

平野:たしかに、テーマとしては焦点を絞りにくいところはあるかもしれませんね。

松本:ただ、野球の場面では仲間がたくさんいるわけで、例えば後輩のD君はどのようにすればよく打てるようになるかとか、このチームをどのように改良したらもっといい攻撃が出来るようになるとか、いつもそういう視点で仲間を見たり後輩を見ていたように思いますね。そういう自分がいました。

平野:選手としてはピッチャーからバッターに転向したのですか。

松本:一年生の夏休みに社会人と練習試合したときに、ある1球を投げた途端、肘にピクッという痛みがきてしまって、半年間棒に振りました。腰も痛めたりして、数ヶ月は辛かったですね。それで、二年生になって、投手は何人もいたのですがこのチームはあまり打てないものだ

からなかなか勝てないので、「監督、おれ、バッターになります。そのほうが貢献できます」と生意気に申し出まして、外野手になって…。

平野:それですんなり、

松本:そうですね。毎試合出るようになりました。

平野:それで、キャプテンになるのですね。

松本:三年生の後半になると最上級生になりますので、おそらく投票でキャプテンを決めたと思うんです。なぜか最多得票で選ばれてしまいました。後で理由を聞いたら監督に文句を言えるのはお前しかいない(大笑)という返事が返ってきました。自分は大学の野球部ではこういうものを研究したいし、こういう野球をやりたいという考えがあったのですが、実際にはちょっと違ってしまったので、それは多分他の仲間も感じていたのでしょうね、それが背景にあったと思うのです。

この監督は、国立大学にもかかわらず、時には選手を殴るんですよ。同級生が20数人いましたけど殴られていないのは僕ともう一人だけでした。もう一人の学生はあまり練習に出てこないの殴られなかったんですね。(笑)だから、実質殴られていないのは僕だけだったんです。

平野:どうして松本さんだけ？

松本:どうしてですかね。殴り返されるとでも思ったんですかね(大笑)。そんな理由で僕がキャプテンになっちゃったのです。人間性とか行動力とか考えますと、僕はその器ではないのですが、一応そう

なっていました。

平野:話を伺っていると、いつも自分なりのやり方についてイメージを持っていて、それをマイペースにやっっていこうとするようなところがありますかね。プレーにのめりこむよりむしろいつも客観的に観ているようなところがあって、それが現在の仕事の中に生きているように思えます。

松本:そういうふうには言っていないかとホッとしますが、自分では我儘で自分勝手のように思いますが、ハイ。

平野:バランスですかね。マイペースの一面を持っていないと指導がぶれてしまうということもあるでしょうし、行き過ぎるとついてこられなくなることもあるかもしれない。その後、大学院に進まれていますよね。

6. スポーツ心理学と「PM理論」

(大学院時代)

松本:スポーツ心理学を専攻しました。スポーツ心理学といってもいろいろな内容があるのですが、一番関心があったのはリーダーシップの問題でした。私が教員になったり野球部の指導をする上で、一つの基本になっているリーダーシップの理論に「PM理論」というのがあります。これは九州大学の三隅二不二先生が提唱したものです。いろいろなスポーツ集団だけでなく会社などの集団を研究対象にして築き上げた理論です。2つの次元で4類型するのですが、縦軸にパフォーマンス次元(集団の目標達成の機能、業績や

成績をいかに上げるか) をとり、横軸にはメンテナンス次元 (集団維持機能) をとります。指導者によってどれを強調するかですね。例えば、ここ、左下を **p m型**と呼ぶことにしますが、目標達成に

も人間関係の調整にも消極的なリーダーのタイプです。反対の右上の **PM型**は目標達成を強調しながら人間関係にも気を配るリーダーのタイプ。この右下の **p M型**は目標達成よりも、

集団内の人間関係に気を配るリーダー、そして左上の **P m型**は目標達成に重点を置き、人間関係にはあまり配慮しないリーダーということになります。これは4類型で示しましたが、さらに16類型にも出来ます。こういったいろいろな指導者がいるわけですが、皆さんがもしリーダーとするとどの類型に属するか考えてみてください。

いろいろな集団がありますが、集団効果の基準を部下の意欲・満足度、職場のコミュニケーション、事故の低発生率にした場合は **PM型 > pM型 > Pm型 > pm型**となるし、集団効果の基準を生産性とした場合には短期的には **PM型 > Pm型 > pM型 > pm型**、長期的には **PM型 > pM型 > Pm型 > pm型**となるという結果を突き止めています。ですから、最終的には **PM型**の目標達成を強調しながら人間関係にも気を配

るリーダーのタイプが良いということになりますね。私が野球部の監督とすると、一人ひとりを上手くするためにどうしたらよいか、どうやって腕を動かしたらもっと上手くバットが振れるのか、どうや

Pm型(P型)

仕事に対しては厳しいが、グループをまとめるのは苦手。

pm型

仕事に甘く、部下の面倒見も悪い。

PM型

生産性を求めつつ、集団の維持にも気を配る。リーダーの理想像。

pM型(M型)

部下の面倒見はいいが、仕事では甘い面もある。

ったらもっと上手くボールを投げられるのか、から始まって僕と選手との人間関係をいかに上手く保つか、言葉をかけるとか、時には褒めて、そういうことを一生懸命やるということ

ですよね。集団の中に何かトラブルだとか、上手くないことがあればそれを如何に解決するか、そういうことについてエネルギーを費やすかということですね。結局は **PM型**が一番よいので、自分もこれを目指して指導をしているところがあります。これを大学院で学び、大きな財産となりました。他にもいろいろな理論がありますが、僕はこの理論を信頼してきました。それから、リーダーシップというのは絶対的なものではなくて、流動的なもので動き回る生き物だと三隅先生は本の中で書いています。

参考: 代表的な著書: 『リーダーシップの科学的指導力の科学的診断法』 講談社 1986

(ブルーバックス)

ですから、きょうのリーダーシップと

明日のリーダーシップは違いますよと、今年のそれと来年のそれは違いますというのです。例えば、原監督がWBCで優勝しちゃいましたが、どういうリーダーシップを発揮したかは分かりませんが

(笑)、ジャイアンツに帰ってきたときにそこでどういうリーダーシップを発揮するかは別物だというわけです。そんなことをいつも意識して、きのうのオレと今日の俺は違うかなとか、きのうはよいリーダーシップを発揮できたけど今日はダメかも知れないとか振り返りながらやっている自分がいます。

平野:それから、いろいろな実験をなさったと伺っていますが、

松本:修士論文を作成しなければなりませんので、「運動中における表情がパフォーマンスの及ぼす影響」というタイトルで書きました。これは、簡単に言えば、苦しいときに苦しい顔をすればより苦しくなってしまうのではないですかということ。苦しいと思ってもニコツとすれば、もしかしたら意外と気持が楽になったり、苦しさが軽減されるのではというものです。それが運動の成績にも影響が出てくるんじゃないですか、そういうことなんです。例えば、全身的な運動、長い距離を走ったり苦しいことを繰り返したときに、大変だけれどもニコツとしたらちょっとパフォーマンスが良くなる傾向が私の実験ではありました。逆に、握力を強めるとき、局所的な運動ではニコリしちゃうと反って力が出なく

なってしまう。そういうのが僕の実験の結果です。これはどういうことかというのと、同じことをしたとしても課題によって結果は変わってきますよということ。それから、私にしてみれば、A君に話したこととB君に話したことと同じ話をしているのに、結果は違ってくる、対象が異なるとおのずと方法論は異なってくるはずということを知りました。だから、多くの生徒に向かって同じことを言ったりやらせたりすることは、ある子にはいいけれどある子には余り効果ないということなんですね。ですから、そういうものだと思って教師や指導者をやっているところがあります。

平野:進路選択の中でかなり明確な目標、目的意識をもって大学院へ進学したのですか。

松本:大学院へいこうと思ったのは、大学生活4年間であまり勉強が進まなかったんで、これですぐに教員になってしまうと自分も多分情けない思いをするし、生徒にも申し訳のないことになってしまうのではないかと考えたからです。もう一つは野球をしばらくやりたくはないという思いですね。子ども時代からずっと野球をやってきたんです。ですから、少し離れたたいという気持がありましたね。そして実際に院の2年間はラグビーのクラブチームに入ってラグビーをしていました。

平野:クラブチームといますと？

松本:大学のチームではなく、大学周辺の

歯医者さんや研究者や勿論院生もいましたが、昔やったことがあるとか好きだとかという人々が集まってつくったチームです。

平野:ラグビーは大変なスポーツだと思うのですが、初めてですか。

松本:いえ、授業ではラグビーを専攻しましたし、高校時代も多少はやりましたので少しは経験がありました。

平野:で、大学院時代は少し野球から離れていたということですね。それで反ってリフレッシュできたということですかね。

松本:そうですね。リフレッシュできたし、ラグビーをやって感じたことは1試合やりますと運動量が多いのでクタクタになりますし、擦り傷が絶えないのですが、これが快感に変わるということです。何かもう満足するものがそこにあって、だから僕はラグビーはすごくいいスポーツだと思って、終わった後のこのなんともいえない充実感を野球の指導のときもいつも考えなくてはいけないという気持ちになりましたね。野球って外野でボーっとしていたら一試合が終わっていたなんてね。

平野:そういう意味では野球は特殊なスポーツとも言えるかも知れませんね。試合時間中フルに動いていないですものね。
松本:ですから、体育の授業での取り上げられないのです。

平野:ラグビーをやることによって新たな視点を持つことになったということですね。

松本:だいぶ前なのですが、高知県で何が理由で部活を辞めていくかという生徒の調査がありました。それによると厳しくて辞める生徒は少なく、生温くってこれじゃ満足できないとやめていく生徒の方がずっと多いということです。ですから、今日も頑張ったぞとそういう思いをもって一日が終れる、そういったものをつくっていかねばいけなないと思いましたね。

平野:そういうふう気づかれたことを具体的に高校野球の指導でどういう形で生かしたのですか。

松本:本多君、どうでしたっけ。彼は前橋高校のある学年のキャプテンです。
<じっと考えている様子を見て>

平野:すぐには出ないようなので、ちょっと考えてもらって、後でお尋ねします。ということはいよいよ教員の道を進むことになるのですが、ここで10分ほど休憩を挟んで後半でお伺いしていこうと思います。

*****<休 憩>*****

7. 野球はテクニックのスポーツ

平野:教員のスタートは中央高校だったのですが、採用の段階では野球部監督ではなかったと漏れ伺っておりますが…

松本:4月1日採用なのですが、その何日か前に新任校の校長先生の面接がありまして、何日に群馬会館に来てくださいと

いう電話がありました。いろいろ話したのですが、「松本さん、部活は何を持ちますか。〈平野：その質問自体意外ですね〉今顧問がいなくてあいているのは水泳部とバスケット部なのですが…どっちがいいかね」というのです。

「あっ、ハイ。僕は泳げますので水泳にしてください」と答えて面接は終わりました。行ってみたら、顧問の山口先生のご配慮とご尽力で野球部の顧問になっていました。

平野：生徒たちとの出会いはどうでしたか。

松本：私が赴任してすぐに春の県大会があったのですが、最初はスタンドで観ました。前橋工業高校にコールドで負けたと思います。そのあとすぐに監督になりました。コールド負けとはいえ、意外と能力の高い生徒がいましたので面白いチームになるかもしれないと思いました。

平野：どういうふうチームをつくっていったのですか。

松本：僕はあまり根性がないので、精神的なものとかはあまり取り入れたくはないのです。野球はテクニックが大切と思っているから彼らになるほど受け入れてくれる材料やテクニックを提示して行きました。〈平野：具体的には？〉そうですね。答えるのは難しいのですが、ニュートンの法則とかケプラーの法則とか、野球って物理学ですから、ボールとバットが衝突するとボールはこういう回転して伸びていくとか、スピンを掛ければこうなる

とか、ピッチャーに対してもこの2本の指でこうやってボールに回転をかけると、空気がこっちが密になるからこう曲がるとか、そういうことをずいぶん話しましたね。

平野：この新チームはどうだったのですか。

松本：能力のある選手が結構いましたが、このチームを持って2ヶ月間で救急車を3回呼んでいますね。目の近くにボールが当たって腫れ上がった選手を救急車で運びながら、失明でもしたらどうしよう、俺の責任だな、と思いながら始めました。

平野：どういう状況で事故が起こったのですか。

松本：薄暗くなったところで試合形式の練習をやっていて起こった事故でした。ピッチャーの投げた球を避け切れず顔面に当てたのです。バッティング練習では近くから投げた球をライナーで打ち返して避け切れなくて顔面にぶつかって鼻を骨折したというのもありました。

平野：安全面の配慮への経験がまだ不足していたのですかね。

松本：そうですね。このくらいなら大丈夫だとは思っていたのですが、反射能力の問題もありますから、配慮が足りなかったのですかね。また、チームの和を乱す言動をするある生徒がいて、体育教官室に呼んで何度も話し合ったことがありました。

野球は所詮ピッチャーが大事なので、

僕が行ったときに二年生で、やがて西武ライオンズにドラフトされた亀井君がいましたから、そういう意味では良いピッチャーがいて助かりました。

このコールド負けしたチームは夏の大会でベスト4まで行きました、短期間でそこまでいけたので多分自分のやろうとしていることは間違っていないかもしれないと思いました。また、2年後の夏の甲子園に初出場できましたから、そこまでは自分なりに順調にいけたと考えています。<平野：もう少し>高校野球はピッチャーのウエイトが大きいといいましたが、甲子園にいけたときは二年生ピッチャーの小島君でしたが、急成長してとても良いピッチングが出来るようになっていました。それに、このときは運が味方したとしかいえないようなことが起こっています。<平野：というのは？>神様が間違はなく味方してくれたよね、というシーンが2回ほどありました。1回目は3回戦で桐生高校との対戦で起こりました。桐高は強かったんですけど、小島がランナーを誘い出してダイビングしてタッチしにいったのです。そしたら脚が攣っちゃったんですね。動けなくなってしまってこれはダメだと思った瞬間ににわか雨が降ってきて一時中断です。(びっくりした笑い声) 10分くらい降っていました。ベンチ裏に連れて行って必死にマッサージして、再開したときにはすっかり元気を取戻していました。これがなければ負けていたと思います。もう1度は決勝戦

で、9回に同点に追いついて延長戦になったのですが、今までヒットを打ったことがない選手や初めて代打に出した選手がライトにヒットを3本打ったのです。3本目のライトフライは相手のグラブに1回入ったのが、ポロリとこぼれてこれで同点になったのです。(大笑) 橋本先生には申し訳ないのですが…。神様はいるなあと思いましたね。

平野：不公平な神様ですね。そういうことがありつつも、基本的には良いピッチャーに支えられて甲子園まで行け、指導者としての船出も非常に順調だったということです。それでも、逆に期待とかプレッシャーはなかったのですか。

松本：私の人生を振り返ったときに、17歳で甲子園で完全試合が出来たのは僕一人の手柄ではなくみんなのおかげなんです。僕自身のレベルで考えれば、「俺の人生これでOK」、「終わってもOK」ということなんですよ。それ以後はどうでもいい人生なのです。でもやっぱり指導者として多少なりとも周りから松本は選手としても頑張ったけれども指導者としても良い指導者じゃないのといわれたという気持は当然ありますよね。ですから、多少のプレッシャーなりを自分にかけてながらやったところはあると思いますね。中央高校3年目で甲子園に行けて、それも一つクリアしちゃったので、またおまけのどうでもいい人生になってしまった、そういう感じですね。

8. ミーティングは帽子をかぶったままで

平野:そう自分にいきかせながらプレッシャーを感じないようにしているというふうにも思えますよね。まともにプレッシャーを受け止めているよりいい意味で居直っている方が強みになりますから。

チームづくりは、精神主義に陥りたくないと言っていました、その一環として選手に対して“ミーティングは帽子をかぶったまま”というのは何時ごろから始めたのですか。

松本:大学のときにキャプテンになって、「カントク！ミーティングのとき帽子を取るのはいらないんですけど…」って言ったのです。<平野：それがキャプテンになった理由でもあるのですね>それだけでは寂しいのですが…(笑)。中学生が帽子を取って監督を敬って話を聞くのはいいことかもしれないけど、大学生はもういいんじゃないですかと。監督が良いアドバイスや指示を出してくれればそれなりに聞きますよ、それでなければ聞きませんと申し上げました。帽子をそういう手段に使いたくないという気持ちはありましたね。

実は、野球自身もそうなのです。野球をあまり教育の手段に使いたいとは思わないのです。野球は野球の楽しさがあって、本質的に楽しい部分を横っちょに追いやって「教育」だって言いたくないのです。野球はもっと楽しいものなんです。ストイックすぎると…<平野：高野連

の考え方に違和感があると？>これは、難しい…(大笑)。僕も歳を取ってきたなとつくづく思うのですが、基本的には好きじゃなかったんです。でも、最近いろいろな事件が起こるでしょう。そういう時、多少なりとも高野連のあのストイックさが必要な時代になってきたのかとも思えるのです。高体連もいろいろな同じような問題がありますよね。例えば指導者がビシビシ叩いている場面がありますね。で、高野連みたいに監督を休養させたり対外試合の出場を見合わせたり、いろいろ考えているみたいですよ。だから上手くいえないんですけど、高野連の考え方はだいぶ緩くはなってきましたし、一時よりはだいぶ必要かなという気がしてきています。

平野:高野連の教育主義については一教育学者としては思うところがあるものですから、言いづらいことまで聞いてしまいました。

松本:高校野球は表にいっぱい出てきますが、出てこない競技は沢山あるので、今度はそちらの競技も突っ込んでみてください(大笑)。

9. 出場選手(背番号)は投票で決定

(中央・前高監督時代)

平野:高野連は注目されているが故に表に出ることが多くなりがちですよ。

もう一つどうしても伺いたいことがあります。それは“出場選手を投票で選ぶ”

方式のことです。これは何故するのですか。

松本:監督になってすぐに始めたかどうかは分かりませんが、早くから始めていたと思います。やっぱり基本的にはこれは私の野球部ではありませんという意味です。みんなの野球部です、みんなの大会ですという私からのメッセージなのです。意外となにか、監督ってあたかも自分の野球部のように思っていて偉そうな人が多いですね。それって違うんじゃないのと思っているんです。俺は多分来年も監督をやっているけど、みんなは今年で選手は終りだよ、みんなの最後は納得できるようにやりなさいよということの一環ですね。あとは、監督の前で良い子になっていて、裏へ回ると何をしているか分からない子がいると困ります。私が一番嫌なのは監督の顔色を伺いながらグラウンドに生徒がいるということです。僕が高校球児のときに、監督が来たから気合を入れてやるふりをしようなんてことをよくやってましたが、疲れしました。

(笑) 嫌だったですね。大人がいようがいまいが自分たちの好きな野球を好きなように、いい形でやってもらいたいというのがありますね。

平野:それは監督不要論ではありませんよね。

松本:監督、指導者がいないとですね…。そうですね、もし勝利を目標にしているのであれば子どもたちだけだと経験不足の部分があるから難しくなると思います

ね。大事なところ、ポイントはしっかり押さえて、それ以外のところはみんなが納得いくようにやれよというスタイルをとっています。もう一つは私自身の“逃げ”があります。中央高校時代のある年、「大会のベンチ入りを決めるから投票やるぞ」といったら、「今年は先生が決めてください。そのほうがみんなが納得します」といわれたんです。「そうお、いいの?俺が決めちゃっていいの?」。で、いろいろ決めて発表したら、背番号1をもらえると思っていたのに貰えなかったピッチャーの子はその後、壁を蹴っ飛ばしてましたし、ベンチに入れると思って入れなかったひとりの子は私服に着替えてどこかへ行ってしまった。これは酷いですよね。それから次の日ある選手の母親から電話がありまして、「うちの子、ベンチに入れないのですよね」「そうなりましたね」「どうしてですか」こういわれて、「どうしてなのでしょうね」(笑)。この電話は今でも忘れられません。ですから、監督していて嫌なことは大怪我されることとベンチに入れなかったことにまつわる様々な人間模様ですかね。そこから逃げたいというのがあります、ハイ。

平野:そうやって、実際に投票で選んだオーダーと監督の考えているベストオーダーとはどの程度重なるものなのですか。

松本:ほとんど思っていたのと変わりません。20人選ぶとして1人ですかね。僕が見てないところで努力している仲間、コイツはどうしても必要だと考える子を

選ぶことがありますから、そういう意味で1人替わる可能性はありますね。<平野:そのひとはどうするのですか>生徒たちの選んだままです。それから生徒は監督から選ばれるよりも仲間から選んでもらった方により誇りを感じていますね。

平野:ということは、逆に選ばれなかったダメージもありますよね。

松本:しかし、それは受け入れざるを得ませんよね。おそらく保護者も受け入れざるをえないでしょう。

平野:監督なら文句を言えるけれどもチームメートには言えない。

松本:前高の例では、一年生には(入部したてですから)投票権がないのですが、それでも選ばれちゃう一年生がいるのです。その子は力があって、勝つためにはチームにとってこの一年生が必要だと思えば上級生は彼に投票するのです。それは中々素晴らしい、すごいなと思いますね。やはり集団の目標は良いチームを作って勝利することですから、それがはっきりしているのです。最初この集団はチャンピオンスポーツを目指す集団で、レクリエーションを目指しているわけではないことははっきりさせてあるので、そういう結果になるのかもしれませんが。

平野:そういうことを徹底させた上で投票させるわけですね。技能はあるけど人望はないので選ばれなかったなんていう例はないのですか。

松本:可能性としてはありますね。でも、

そこまで人望のない子はいなかったな。

平野:もし、そういう例が出てしまえば介入せざるを得ませんよね。

松本:今まで介入したことは一度もありません。それまでにPM理論に基づいてM次元、「集団を維持する」をしっかりとつくっておきますから、そういうことはなかったです。

平野:PM理論で考えたのですが、PとMを最大にするというのは異論のないところだと思うのですが、PとMはそう簡単には両立しない、むしろ相反する、いいパフォーマンスを求めようとしたらMが犠牲になり、逆に集団の和を優先することによってPに皺寄せがいくというようなところがありますね。要はPとMを両方とも最大にするためにはどうしたら良いかということをどう具体化していくかが課題としてあると思います。

松本:その通りだと思うのですが、野球のテクニックは簡単そうで難しくって、個性とか適性とかを考えると難しいので、やはりあんまり遠回りせずにできるだけ近道を通して成功体験をチョコチョコと味あわせてあげられれば多分両立出来るものだと思うんですよ。<平野:なるほど…>反復しなければ身につかないことがいっぱいあるから、最低限の回数は繰り返し何度もやって時間もかかるんだけど、出来るだけそれを近道で達成させる。そのためには指導者としての観察眼や経験とかがものをいうのだと思います。それが上手くないかないとPがすごく

大きくなってしまふ。ある時期僕は、プロ野球でも、どこが勝ってもいいのですが、見るのはピッチャーの腕がどういふふうに動くか、脚（足）がどういふふうに、というところにしか関心がなくてそこだけを見ていました。あるときは、整形外科のドクターが動作分析一肩や肘に負担のかからない投げ方—した論文を読み漁りましたね。そういうのが生きたかなという気がします。偉そうなことをいっていますが、全ての選手を上手く育てられたことはないから、難しいのですが、そういう心がけで努力だけはしているつもりです。

平野:先ほど「野球はテクニックだ」とおっしゃったのはそのあたりのことを言ってるわけですね。

松本:だからあまり的を射ていないことを百回やるんだったらポイント押さえたことを5回やったほうがよほど上手くなるということです。

平野:むしろ、多いタイプの指導者像は百回やらせる方ですよ。松本さんはPとMを両立させる指導法を実践なさっているわけですね。

中央高には7年いたわけですが、甲子園に出てしまっただけにその後期待が高まって大変ではなかったですか。

松本:うーん、でも周囲の期待は私にとっては…。自分が目指す野球が出来ているかどうか、時には勝つこともあれば負けることもあるわけで、自分の納得のいく高校野球ができていようかどうか最大の

課題ですよ。

平野:中央高校のあと母校の前橋高校へ転勤したのですね。どういう事情で転勤なさったのですか。

松本:人事のことですので分かりませんが、でも、希望調書には異動希望あり、出来たら前橋高校へとは書きました。

平野:それは母校で監督をしたいという意味ですか。

松本:そうですね。将来教員になって、高校野球の指導者＝母校の監督、そして自分なりのやり方で甲子園に行けるかどうかというのが教師の道を選んだ私のテーマですから。

平野:母校に監督として赴任してみようだったのですか。

松本:前高は私が在籍したときとは場所が変わっていましたが、初めは母校という感じはしなかったのですが、ユニフォームを着ればだんだん母校という感じが蘇ってきました。こと野球に関しては、選手の能力もまあまあのレベルで、頑張れば大舞台に登れるという感触を得ました。

平野:松本さんを見たとき、選手の期待は高まったでしょうね。

松本:どうなのでしょう。そう思ってくれた選手もいるでしょうし、そんなに甘いもんじゃないと思っていた選手もいたでしょうしね。私は、もし高校の野球部監督になれたら20年の間に1度甲子園へ行けたらいいと考えていました。特別強い高校へ行けば何度も行けるでしょうが、

普通の野球部では20年自分で頑張ってみて1度行ければと。でも中央高校では3年目にいってしまったので、後は17年間は行けないと思っていました。(笑)でも、母校に何年間いられるか分からないですから、そこで1回はとっていました。

平野:母校の監督になられて初志を貫くために特に考えたことはありましたか。

松本:いえ、特にはありません。中央高校と全く同じです。強いて言えばその思いがより強くなったというだけです。

平野:自分の現役の時代と変わったことはありましたか。

松本:練習時間が短くなったことと休みがいっぱいできたことくらいですかね。月曜日は練習休みです。

平野:それは松本さんが休みにしたのですよね。

松本:そうです。全てそうなっちゃうんですけど。

平野:選手の反応は？

松本:どうだったんでしょう。一人腰が悪い子がいて、「ドクターに診てもらったらしばらく練習を休むように言われたので」「じゃ、練習に来ないの?」「はい」。やがて、アイツは遊んでいるらしいとい

う噂があつて、本人と話したら「じゃ辞めます」といって辞めてしまいました。そんなのもあって、最初の5年くらいは思ったほど勝てませんでした。何でなのかはよく分からないのですが…。

平野:でもなにか…



04年全日本チームのコーチとして世界大会に出場、ダルビッシュや涌井と一緒にいた

松本:前の監督のやり方と私のやり方が違っていたとか、戸惑いとかいろいろあったかもしれません。でも、私は結論付けるとすれば、僕が良いピッチャーを育てられなかったということなのだと思います。

平野:上手い出会いがなければそう簡単にはチャンスはないということでしょうか。

松本:そう思います。

平野:で、転機は何時、どんな形で訪れたのですか。

松本:5、6年目から少しずつ勝てるチームになっていきました。ベスト8、ベスト4、夏、決勝まで行ったこともありました。そういうふうにならなると、中学生のなかには前高へ行けば甲子園に行けるんじゃないかという子が出てきます。そういうことで、戦力がより充実してきましたね。とくに、中学生も保護者もそうですが、周りからの情報をもつて持っているのですね。

ですから、できるだけ良い野球部をつくることに腐心しましたね。上下関係からの陰湿さがあるはいけないし、ある意味居心地のいい野球部を心がけましたね。それから、グラウンドに緑を増やそうとみんなで芝生の手入れしましたね。

平野:チームづくりを練習だけでなく環境の整備を含めてやっていったのですね。

松本:そうですね。休みがないなんて聞くと中学生が拒絶反応を起こすといけなないので、休業日があることやシーズンオフは日曜日にも休みと説明しました。タメエはそうですけど、本当は私が休みたいからですけどね (大笑)。

平野:私など外野席では休まないで甲子園まっしぐらというほうに中学生は惹かれるのではないかと勝手に想像していたのですが…

松本:どうでしょうね。私の本音は休みがいっぱいあるチームが休まないチームに勝つことを証明したいのですが。生徒にも他人の見ている前で努力するのもいいが、他人の見ていないところで努力することも大事だよと言っているのです。

平野:ここまで2時間ばかり伺ってききましたが、最後に今現在のチームづくりと今後の見通しについてお話を聞えますか。

松本:いま、中央中等教育学校に転勤して1年経ったところです。野球部も去年の夏休みから見ているのですが、部員はすごく少なくて、やっとチームが成り立っている状態です。いま、最上級生、六年生が9人、五年生が2人いたのですがこ

の間辞めました。高一に当る四年生が7人ですから、夏の大会には出られますねが、秋の見通しは立っていないですね。難しいですよ。僕の考えていることを一から十まできちんと説明しないと分かってもらえない部分がいっぱいあるような気がしていて、学校が変わったし、生徒も変わったから仕方ないんでしょうけどね。僕は「坊主頭止めてよね。カッコいいスポーツ刈にしてね」っていうんです。前の部長さんはお坊さんだから言えなかったのですが、「僕は田舎者だから、都会的センスあふれる野球をつくりたい。スポーツ刈がカッコいいからそれにしてね」と言ったのです。ところが、どうも坊主頭じゃダメということだけが一人歩きしたらしく、この間試合があったのですが、帽子の後ろから長い髪をたらしている生徒がいたのです。「おいおい君たち、スポーツ刈って言っただよ。坊主頭ダメねって言っただよ長髪は野球する上ではまずいんじゃないの」と言ったのです。そしたらそれが悪かったのか、「野球部を辞めます」と言ってきたのです。<平野:難しいですね>それから「今日のピッチャーのタイプはこれこれ云々だから左バッターを多く出しますよ」と言ったら右バッターが辞めてしまったのです。分からないのは私のところに来ないで、いきなり練習に来なくなってしまうんです。指導力不足 (爆笑) なんですけど、現代の若者は難しいですね。だから私は自分のポイントをチョコチョコと冗談

交じりに話すのですが、その行間をなんとかもう少し読んでくれないかなと思うのです。全部説明しないと分かってもらえない。もしかしたら保護者もそうかも



中央中等教育学校監督としてノックする松本さん

しれませんね。松本というキャラクターをまだ分かってもらえていないのかもしれない。そんなことで今ちょっと苦しんでいます。

平野:有難うございました。それではこれから質問でもご意見でもご感想でも何でも結構ですからお出し願えればと思います。最初に卒業生に宿題が出ていましたので、そこから始めますか。

10. 高校野球を考える

本多さん:松本先生に前高でお世話になりました本多と申します。大学院でラグビーをなさっていた時に感じたことをどのように野球部の指導に生かされたかというところで僕に質問がきたのですが、僕が生徒のときに感じていたことは松本先生という存在自体が偉大な存在というところもあるんですけども、一方でそれを感じさせないようなところがあって、選手の中に入って一選手のような形で生徒と関わっていた感じがします。さっき先生がおっしゃっていた話の中では監督が

どのような指導をすればいいかに関しては選手と同じ目線で監督というプレイヤーがもう一人いて、プレイヤーがどうい

風な動きをすれば野球を楽しめて、そのチームが勝利に結びつくかということと一緒に考えていけるような存在だったと僕の中ではありました。で、個人的にも今教員をやっておりまして、このあと指導者の道に進みたいと思っていますのですが、そのようなときに選手と接するときには松本先生がどのようにお考えになっていらっしゃるかということをお聞きしたいと思います。

松本:答えになるかどうか分からないんだけど、指導者として一番悲しいのは選手が自分のところから離れていってしまうことなんですよ。試合に出ている子は良いですよ。何も言わなくても頑張るんだけど、そうでない子にできるだけ声をかけたり、やろうとしていることが少しでもいい形を出せるようになったときに褒めてあげたり、スポーツ心理学の中で「結果の知識を与える」ことが動機付けにとってとても大事なことだといわれています。「結果の知識を与える」ことというのは、いま行ったことが良いことなのか悪いことなのかを言って

あげる、何で良いのか、どこが良いのかを伝えてあげるということです。ですから、レギュラーでない子たちが何か良いものを見せたときに声をかけてあげられるかどうか、はいつも意識していたような気がします。あとはさっきのテーマだと一人ひとりが今日一生懸命身体を動かして練習をよくやったと、そうやって家に帰ってもらいたいわけですよ。一つは道具を沢山用意することから始めたような気がします。前高に赴任したときには意外とボールがあまりなかったり、移動式ネットが少なかったりして練習が制限されていました。監督になった途端にそれらをいっぱい買って借金を百万円くらい作っちゃった。施設や用具が十分ないとみんなが練習できないんで、そういうところから始めました。あと、試合に関しては出ている子は当たり前だけれど、ランナーコーチャーもとっても大事な役割を持っているんです。それから相手のチームを戦力分析する係の子がいなくなかなか勝てないので、全員が何かチームのために貢献できるポジションをつくりたいなと考えていました。

内山さん:松本さんの話の補強をかねてちょっと発言します。16歳の松本少年からずっと付き合っていて、中央高校では同



僚としてベンチに入っていたりですって見てきたものですから先ほどからの話は私が見てきたとおりのものでした。それでもいくつか補強しておきたいと思うのですが、松本先生を見ていて研究心というかその配慮には感心させられるものがあるいくつかありました。松本語録みたいなものが長い付き合いの中で私の中に蓄積されています。高校時代に監督とか怖い先輩が来ると緊張すると言っていたのですが、そうでない安心してプレーをしているときに顧問としてグラウンドについていました。私は素人なんですけれど、野球が好きなので技術的なこともいろいろ考えていたんですが、ずっと投手を見てくる中で、ブルペンに行くと「いま何を考えて何を投げている？」って聞くとパッと答えが返ってくるほとんど唯一の投手でした。大体投手というのは監督がよくコントロールして何球どこへ投げろとか今日はこれを考えてやれというような指示を受けているのですが、(監督が会社員だったせいもあるのですが)彼は自分で考えながらやっていました。先ほど、甲子園の完全試合のときの話がちょっと出ましたが、本番の二日前までは全くストライクが入らなかった。公開練習でも1球も入らなかったと解説者が言っていました。練習のときにブルペンに行くと「どうしようもないな」と言ったら「ハイ、どうしようもありません」と言いながら、それでも投げ続けていました。二日前、芦屋高校での練習のときブルペン

では前日とは全く違う球を投げていました。びっくりして「どうしたの？」って聞いたら、「投げる位置を5cm低くしてみました」と言ったのです。私は監督のところまで走って行って、「松本、戻りました、大丈夫です。いまならばどのチームも2点で止まる。ウチの守備ですからエラーで1点、あと1点はポテンヒットかなんかで失うでしょうから」と報告しました。監督も駆けつけてきてそのボールを確認して、安心していました。その通り、本番ではああいう投球が出来たんですが、あれは彼の研究心と言うか探究心の賜物だったんじゃないかと考えています。

それから、中央高校で私は野球部の部長、松本さんが監督のときですが、部員が70名くらいいました。彼が前高の選手の時には三年生は8人しかいませんでした。それで、下級生を一人キャッチャーに入れて完全試合をしたのですが、その時の練習方法を知っているものですから、これほど多い部員をどういうふうに満足させながら練習をするのかと思って見ていたら、びっくりしたんです。それは、一塁手の前にネットを複数用意して、サードは彼用の、ショートはショート用のネットに送球させるのです。そうすると複数のサードやショートと一緒に練習させられるわけです。そういう工夫をしていました。多くの選手を練習させるための工夫はすごいと思いましたね。

もう一つは、夏の甲子園へ行く県大会の決勝で前工と対戦したのですが、そのときに前日ミーティングをして（私はそれを知らなかったのですが）「6.5対3.5くらいの差があるから明日は気楽にいこうぜ」というようなことを言ったらいいのです。前の晩10時頃、さて松本監督は何をしているだろうと思いながら電話をしてみました。「どうしてる？俺はビールを飲んでいい気持だぞ、どうだ？」って聞いたら、「いま、前工のビデオを見て、最後までよく調べるつもりです」と言って、翌日選手たちに「5.5対4.5くらいだから十分勝つチャンスがある」と分析しなおして訂正していましたね。調べつくすのですね。これらは秘話中の秘話ですが、彼の技術に対する研究熱心なのは例えば、選手に絶対「がんばれ」と言ったことがないことから分かります。ガンバレではなくて、「ここをこういうふうにしてみたらどうだ？」と必ずいうのだと（選手たちが）言っていました。頑張れは私たちもつい言ってしまいがちですが、技術に関する松本流の考えがそこにはあったように思えます。それから、本人は勉強しなかったといっておりましたが、最後の春の関東大会のときに全員に教科書を持って行けと指示しておきました。私は英語の教員なのですが、毎晩彼らに英語の授業をしていたのです。で、「先生、この辺でお終いにしましょう」というのは必ず松本君でした。（大笑）そして付け加えるのが「明日も勝ちますか

ら」でした。そして、その通り決勝まで行きました。それであるとき、「みんな勉強が嫌いだからなあ」と言ったら、「いや、先生、そんなことはありませんよ。みんな勉強したいんです。」と言ったのです。そのとき、頭をガーンと殴られたような気がしました。この青年たちに野球ばかりさせておいて申し訳ないと思いましたが、彼の語録はいっぱいあるのですが、そのほんの一部を紹介させていただきました。

加藤さん: スポーツは全くダメで、小学校時代から草野球で三振ばかりしていました。でも観る方は



好きで先日もビール片手にWBCを応援していました。先生のお話の中に「野球はテクニックのスポーツ」というのがありましたが、スポーツはすべてテクニックのような気がするのですが、あえてそういうふうにおっしゃられるようになったのは何故なのか関心のあるところなのですが。いまの内山さんの話の中にも少し触れられたようにも思えるのですが、もう少し先生の言葉でご説明いただけるとありがたいのですが…。

松本: 確かに何でもテクニックなのですが、他の競技に較べてテクニックが結果を左右する割り合いが高いのが野球じゃないかと思ってしばしばそういう表現を

しているんです。いま、内山先生が5 cmとおっしゃいましたが、そのとき5 cmと言ったかもしれませんが、私の感覚で2、3 cmだったと思います。ここで腕を振っていて、ずっと投げていたのですが、いいボールが行かないのです。で、いろいろ試行錯誤して2、3 cm下げたらその瞬間から伸びるボールがいったんです。その2、3 cmがパフォーマンスをこんなに変えるということを実感したものですから、そういう表現をよく使うんです。バッティングでもボールは直径およそ7 cm、みんな真ん中を打とうと思っているから、その上下3.5 cmなんですけれども、ピッチャーにしてみればバッターの思惑を2 cm上下に狂わせれば勝ちですよ。ほんのそれだけが上手く行くか行かないかで結果がこんなに変わってくるわけです。生徒たちを見て、いろいろなことをさせるのですが、何か上手く動きが嵌まったときには本当に打球もガラッと変わる。そういうのを考えると、あんまりそこに根性だとかやる気とか気合だとか言いたくないのです。みんな好きでやっている野球ですし、やる気はあるので、根性を入れて打てれば世話がないのですが、そうはいかない。ランニングを一生懸命やればいいピッチャーになれるんだったら陸上選手はみんな良いピッチャーになれるわけです。そんな簡単なものではないのです。例えばダルビッシュは高校時代は肩に違和感があるというので甲子園ではあまり良いピッチングは

していないことが多かったんです。日ハムだけが指名したんですよね。高校時代のダルビッシュの腕の振りは肘が両手を伸ばした身体の真横のラインより後ろに入りすぎるんです。これを投げる方向にきちんと肘をもってくるのは大変なことなので、無理があって(肩の)前に違和感があったのです。それが日ハムに入ってプロでデビューしたらすっかり直って、そこまで入り過ぎないいい腕の振りになっていました。ダルビッシュは今あのように活躍していますが、それを一つ変えてあげられるかどうかで彼はこれから何十億貰うか知りませんが、そういうふう結びついてきているわけです。私もいま、学校で合宿しているのですが、昨夜遅く、バッティングが上手く行かない選手にバット振らせて、「もうちょっと腕をこうやってつかって振ってみて」などと言いながら、きょう、昼間バッティング練習をやったらその子がすごく良い打球を飛ばすようになっていました。それは僕の喜びだし、そういうテクニク的なところで動きの質を改善することによって、彼が本当に嬉しそうな顔をするわけです。そんなことを毎日やっているのですが、野球は特にテクニクが重要だと、だからそれが出来ているのにもかかわらずダメだということになったときに、はじめて精神論に行くべきだと思っているんです。

藤原さん:私が個人的に気になっていたのは、家族してスポーツ観戦が好きで、

高校野球には特に爽やかな高校球児というイメージがありよく観ます。でもその陰には少年野球にしても礼に



始まり礼に終わるといような精神主義が見受けられますよね。アニメなんかでもそれが強調される場面がよくあります。それに対して松本さんのはずいぶん違うなど思いながらお聞きしていたのですが、現実には「君が代」斉唱「日の丸」掲揚に見られるように学校を背負い・国を背負っている姿があります。日本シリーズでも初日のときにオペラ歌手が「国歌斉唱」をしていましたが、野球そのものの楽しさを追求するだけではない何ものかがあるような気がしてしょうがないのです。それらが球児たちにいらぬ責任感というか勝たなければならないという重石のようなものを持たせてしまい、精神主義が横行する下地をつくってしまうような気がしています。その辺はどうなのでしょう。少しは変わりつつあるのでしょうか。

松本:どうなのでしょう。先ほども触れましたが、私は基本的には高校野球は「遊び」だと思っていて、教育だとはあまり思いたくないのです。「遊び」というのを誤解されると困るのですが、「遊び」はすごく大事なもので良い遊びが出来るかどうかでそれがやがては教育的なもの

に結びついてくるようになってきているのです。答えになるかどうかは分かりませんが、僕は野球が好きで、好きで集まってきた子どもたちと野球をやっているんですけど、その子どもたちには野球をすることそのことに喜びを見出してもらいたいし、そこから何か波及効果が出てきて更にその子の人生が豊かになればそれに越したことはないと思っています。結局、それが最初にあって、いい形でやっていると周りから応援してくれる人がたくさん集まってきて、例えばクラスメートが応援してくれればやっている本人たちも応援してくれるんじゃないや学校のためにも頑張ろうという流れも出てくるだろうと思うんです。だから最初から重石のような責任を背負いながらというのは変で、(本来の姿とは)全く逆だと思っています。それが変わりつつあるかというところが難しく、若い指導者のほうが意外と形を重んじたり、監督が絶対的な存在という形を強く出す人が多いような感じがするし、サッカーもワールドカップがあると必ず国歌をやりますしね、何とお答えしてよいか分かりませんが、基本的にはそれは後からついてくるようにすべきとは思っています。

石原さん:松本さん、今日は有難うございました。前高で息子がお世話になった石原です。松本先生の話のなかで、以前から一つだけ伺いたいことがあったのです。高校野球界で松本先生の世代がリードするようになってから群馬の高校野



球そのものがずいぶん変わってきたなと思っています。それ以前も名だたる名監督はいたと思うのですが、徐々に話題に出ている「精神主義」

の野球の質が変わってきたように思います。その中で群馬県の野球界に大きな衝撃を与えたのが休みを入れるという松本方式だと考えています。それが今県内の高校の中でもずいぶん浸透してきて、かなりのチームが松本先生の方式で週一くらいの休みを入れる学校が増えてきていると思います。その辺のところは松本先生はあまり強調していないのですが、おそらく今までの自分の野球人生の経験の上に大学でスポーツ学を専門に学んできて、それを教育現場に戻るときにどういう形でそれを表現していくかというときにおそらく休みを入れることはかなり大きな要素としてあったのではないかと推測しています。練習方法や練習時間の長さなど、いままでの高校野球を指導なさってきた方々に対してどういう考え方で松本方式を取り入れてきたのかを是非お聞きしたいと思うのです。

松本:今までは自分が休みたいからと言って来たのですが、今もそう思っています。先ほど指導者の顔色を伺って選手がグラウンドにいるのは嫌ですと言いましたが、休みがなければ自己防衛反応的にど

こかでセーブしようとするはずです。野球は100分の1秒を争うスポーツなので、結局瞬発力やスピード・反射能力が非常に大事なだけでなく、毎日休みなくやっていると多分それは失われていくものだというふうに高校時代から考えていました。休んでリフレッシュしなければ筋肉は硬直して動かなくなったり、心理的にも当然飽き（心的飽和）が必ず来るのでそれは必要だと思いましたし、プロ野球のピッチャーが中3日とか4日で登板します。あれは当然疲労が回復するのに休みが必要だということに決まっていますが、筋肉の中には筋肉を動かすエネルギー源、グリコーゲンがあるのですが、それがなくなるとまた補充されるのですが、補充されるまでには72時間かかるといわれているのです。3日間ですよ。よいコンディションを回復するためには中3日は絶対必要なのです。それは野手でもそうだと思います。私はパフォーマンスを高める、つまり野球の本質であるスピードをより磨いていくためには休みが必要不可欠なものと考えています。（休みの導入は）ある意味、自信をもって取り入れました。私にしてみれば、ライバルの学校が休まない方がありがたいのです。（爆笑）休まないと必ずどこかでスピードは鈍ってくるはず。しかもどこかで故障しやすくなるから、



（ライバル校は）休まないで、休まないでと願っているのです。そこに（休みをとっている）ウチのチームが勝つ。いかにして勝つか。野球の本質はスピード、これしかない。先ほど僕は50m走は遅くなるけれども30mまでなら速いと言いましたが、野球はそれでいいわけです。長い距離が得意な選手は野球選手としてはあまり使えないと思っています。マラソン大会で早く帰ってくる子は野球にはあまり向いていない。（笑）あと、男の子はお母さんの遺伝を強く受ける用に思いますので、お母さんが短距離のスポーツが得意な人の子は多分野球に向きますね。お父さんが野球が上手かったのにお母さんが余り足が速くない子は多分難しいと思います。そういうことに性格も絡んでいるので、野球に絶対的に必要な要素スピードを殺さないように心がけています。

針谷さん:中央高校に松本さんと一緒に

赴任しました。私は赴任してすぐに担任をやったのですが、その子たちが3年になったときに甲子園に行ったのです。私自身は野球が大好きで、高校時代は共学でしたので年中野球の応援に駆けつけていました。それで今いろいろお話を伺っていて、なるほどと思う

ことがいっぱいありました。一番大きいのは指導法がすごく科学的だということです。当時なんでああいう練習をしていたのかが肯けるし、なんであの時ああ

という言葉が出たのかが分かったような気がします。実は、中央が初めて甲子園に出たときの8月に私は10日間あまり補習を入れていました。クラスの子が野球部のマネージャーをしまして、「先生!甲子園に行くようになったら私たちは補習に出られないから日時を変更してください」と言ってきたのです。そんな馬鹿な、そんなことはないから心配するなと笑い飛ばしました。私も他の職員もまさかいけるとは思ってもいませんでした。むしろチャンスは前の年の亀井君のときで、準決か決勝まで行って負けているので、今回はそんな有名な選手はいないし、いるとすれば小島君と2年生の背の高い一人くらいだし、3年のレギュラーたちは地味な小粒な子たちでしたから行けっこないと思っていました。でも、生徒たちは負ける気がしなかったと言っていました。

確かに振り返ると逆転勝ちが多かったんですね。決勝戦はどうせ勝ちっこないと最後なのに応援に行きませんでした。えっ、勝ったってよと家に帰ってきて知って驚いちゃいました。

練習の仕方が、夕方頃になるとおやつなんですか、糖分を摂ってたんですよ。何でかなと思っていたのですが、疲れてくると血糖値が下がりますから、それを途中で補給するためだったんだと分かりました。甲子園から帰ってからエアロビクスを取り入れ、見てるだけで面白い練習をしていました。常に新しいものに挑

戦し、練習の中に取り入れる工夫をしていたのですね。最後にいわゆる「松本語録」ですが、私が何で松本ファンになったのかといいますと、甲子園に出てその後ずいぶん中央高野球部は周りからいろいろと期待されプレッシャーがあったと思うんですが、準決勝まで進んだ大会のピッチャーが中島君というのですが、上毛新聞の記事に載っていたのですが、ギリギリ最後のピンチに追い込まれたときに監督に呼ばれ「試合に負けても死にはしないんだから」といわれたと語ったというのです。それで本人は開き直って投げることが出来たと言っていたのですが、通り一遍の言葉ではなくてそういう言葉が中島君の心に入ったんだなと思って、そのときから私は松本さんのファンになりました。

大宮さん:野球大好き人間の大宮です。先

ほどPM理論、リーダーシップのお話ですが、名選手とPM理論はどういう関わりがあるのでしょうか。



というのは世に“必ずしも名選手、必ずしも名監督にあらず”ということが言われます。これはどうしてなのか考えているところがあるので、松本先生はどのようにお考えか伺いたいと思います。

松本:このPM理論からすればどちらかが足りないということになってしまいます。いい選手というのは自分の、例えばイチローが打つということはイチローの感覚は私たちには理解できないというか分からない領域に属しますね。基本的にはボールに自分から近づいて打つのですが、それは普通はバッターにとって不利になるわけです。しかし、イチローは前に動きながらあれだけのミートをするわけですからね。イチローが自分の感覚だけで上手いかない子を指導したらおそらく上手く指導は出来ないと思います。もっと目線を下げてホントに低いレベルから考えていかないとダメですよ。ですから、そういう視点もてないとすれば指導者としては思うようにいかないかもしれないという気もします。あとは人間関係が大事ですから、選手がこの指導者の話を聞くことが自分にとってプラスだと思えば聞くでしょうし、そうでないと思えば聞かないですよ。

この間、日ハムのスカウトとちょっと話をする機会があったときに「松本さん、私たちにとって大事なのはこれからはコーチをいかに教育するかなんです」と言っていました。これはどういうことかという、選手を指導したいんだけど、ワイシャツを着てネクタイをしている球団の上部の人が何を言っても選手が聴かない。つまり、日頃接しているコーチの話なら聞くけど直接接していない人の話は聴かないということです。コーチがよ

い指導をしてくれなければ何もなくなっちゃうんで、私たちにとってみれば、コーチ陣をどうやって教育するかなのです、という話をしていました。どうやって指導するかには、集団をどうやって維持するか、Mの要素が大事になってくるように思うんですが、そんな風なことを話してました。私がいつも意識しているのは指導するときには目の前のこの子に自分がどれくらいなりきれるかということなのです。この子がいまこうやってボールを投げたり打ったりしている、時々その子の真似を自分でしてみるのです。そうすると、こうやって投げたのではここが上手くいっていないとかこうやって振ってるのではパワーが出てこないとか分かるのです。ですから自分がいかにこの子になりきれるか、なりきれたときには多分何かのヒントが浮かび上がってくる気がしているのです。だから、選手になりきれないと、もしかしたらよいコーチになれない可能性が出てきてしまうという気がします。いつも子どもの頃のこととか高校生の頃のことなどを忘れないようにしようと思っています。指導者になると大人になりすぎちゃって、ついつい子どもを馬鹿にするような人がいっぱいいるように思うんです。俺も高校生のときはこんなことを感じていたとか考えていたよねということを大事にしようとしています。

大宮さん:有難うございました。それからこれは私の思い出話なのですが、松本選

手が甲子園に出発する前橋発の電車に乗り込んで行って質問した一人の男がいたのですが、それが私なのです。(笑) そのとき一つの質問をしたのですが…、何となく記憶は蘇ってきましたでしょうか。

松本:あの時、甲子園は坊主頭でないとまづいよねとでみんなで話したのです。スポーツ刈りッぽかったのでいやいやながら丸坊主にしたのです。そしたら僕はマルコメ味噌のCMに出てくる男の子に似ていたので、恥ずかしくて学帽をかぶったのです。学帽などもっていなかったのにどこからもってきたのか被っていました。(大笑) で、両毛線の4人がけの席に座っていました。そのとき質問してくださいました…。

大宮さん:実はこのことは秘密にしてとっておきたいのですが、ここで披露します。「甲子園で最初に投げるボールはどのような球を投げるのですか」と聞きましてところ「ボールしか投げる球はありません」と答えられたのです。(爆笑) そして比叡山高校との対戦で完全試合を達成したのです。これは私の一生の宝物なんです。私も教員を続けておりましたし、その甲子園組のセカンドの田口君、サードの川北君は私の中学時代の教え子なのです。本当に良い思い出をつくってもらいました。これからも群馬県の高校球児たちの夢を実現するために頑張ってもらい、頑張るといっては禁句らしいですが、(大笑) 宜しくお願いします。

松本:すみません先生！17歳で大人の

方をおちよくっていたなんて(爆笑) 申し訳ない気持ちでいっぱいです。

大宮さん:松本さんってそういうユーモアセンスのある方なんですね。大変素晴らしいと思います。(笑)

松本:今いくつかお話いただいた中でふと感じたのですが、石原先生から僕が何で休みをつくったのという話がありましたけど、野球の指導者になる上で裏付けというのが欲しかったのです。大学へ行って勉強したかったことは「裏づけ」、「なんでこうするの」というときの裏付け“こうするとどうなる”というのが欲しかったのです。一度「常識は常識なのか本当に」と疑ってみなければと思って、大学生活をやってきた気がします。当時はまだ水泳をしてはいけないとか水を飲んではいけないとかいわれた時代でした。それは本当なのか？というのがありました。針谷先生が言ってくださいましたが、練習中におやつを食べたのです。それは先ほどの理由の通りだし、当時の常識といわれたことであとで間違いと分かったことがいっぱいあったのです。まだ他のチームは旧態依然のことや、「休まないのが美德」であったから、ある意味、私が学んだ知識でやれば勝てる可能性があると思ったのです。今は若い指導者はみんな高校野球の指導をやろうと思って勉強して指導している。そういうところで周りのチームに隙がなくなって(笑) 勝つのがより大変になってしまいました。でも、全体から見ればすごく良いことです。

僕はさっき、人の見ていないところで努力してとていいましたが、（自分では努力しないのに生徒には言ってるのですが）高校野球の試合はたった2時間で終わるのですが、そこで勝つためにその前にその何十倍も準備しているのです。それは多くの人には見えない部分なのですが、相手を知らないと戦い方が分からないのです。だから相手をどうやって知るかということとはほとんど人がみてないところでやるのです。一つ勝つことは大変なことなのです。それから自分たちを知らないとかダメですね。野球選手としてこの子は能力的に百点満点だと思えば何も言わないです。思うとおりにやってくれていいわけです。でも、70点の能力しかない子に80点、90点のプレーを求めては可哀そうだし、結果は70点もいかないのが普通です。だからその子は70点の野球でいいと思ってやっています。だから、エラーしても打てなくてもそれは実力の範囲内だからしょうがないと思って、「俺がもっと何をしたらこの子が75点になるか」をいつも考えないと何も問題解決しないなと思ってるんです。だから、あまりミスしても打てなくてもその子にでかい声を出したり罵声を浴びせたりということはまず出来ません。その前に「俺がもっとどうすればよかったか」をフィードバックしているつもりです。

平野:すでにお約束している時間を超えているのですが、もし言いそびれていたこととか最後に一言がありましたらそれ

を受け付けて終わりにしたいと思います…。

小川さん:先生の話は野球論に留まらず、高校の先生として、部活動を通してどう



いうふうに高校生を指導していくかという観点で聞かせていただきました。いろいろある中で特

に印象に残ったことは、科学的な指導をすることとミーティングは帽子をかぶったままで出場選手は投票で選ぶということでした。これは指導者として、監督としての生徒との関係のあり方ですよ。それに非常に感銘を受けました。精神主義をやめるとありましたが、精神主義がなんで横行してきたかということ、先生が啓蒙する立場、優位の立場にいて、生徒がバットもミットもない環境からきた子に素質も見つけてというような長い歴史の背景の中で、先生と生徒の関係がおのずとつくられてきたからだと私は考えています。最近では若い指導者もみんな勉強しているようで、知識そのものは相当進んでいるけれど、昔のように無知蒙昧の生徒を啓蒙する時代ではないから、指導者と生徒の関係というのは難しくなっていますね。さっき、長髪を注意したら辞めてしまったということからチラッと伺えるような現在の高校生の生の姿、その中でどういうふうな指導者のあり方が可能

かどうかをお聞かせ願えればと思います。

松本:難しいですね。途中でいったように、いろいろな生徒がいるので一つのやり方で全部を満足させることは不可能に近いという気がしています。ですから、指導者がいろいろな引き出しを持っていて、絶対譲れない部分もありますから、でも、この子にはこの引き出しから、この子にはこれという、個に応じたオーダーメイドの指導が少しでも増えると大部分の生徒も満足するのではないかと思うのです。ある生徒はこの監督を気に入っているけれど、嫌いな生徒もいっぱいいるという集団が結構見受けられますよね。それは仕方ないかもしれませんが。

あとは日本はボランティア的なところがあります。この間から土・日、5時間以上指導すると3000円の手当てが出るようになって…、僕はとても喜んでいますが、少年野球でも何でも指導者はボランティアでやっているのです、結局はその人のやりたいように、言いたいようにやっている部分が多いように思うんです。ですから、本当は資格制度をしっかりとつくって、報酬を出して、それでもし指導者が周りから認められなかったらもう一度勉強しなおして、というようなシステムにしていけないと同じことの繰り返しのような気がしますね。指導者がそうやって知識や経験を深め、広めて対応していくことと同時にそういうシステムがつくられることが必要だと思っています。(拍手)

【追録】編集子が依頼して“松本マジック”の一端を書いていただきました。

ベンチ内から見た「松本野球」

岩根 承成(元前高野球部顧問)

松本稔先生・監督と前橋高校へ同時に赴任したご縁で、私は前橋高校硬式野球部の顧問教師の末席をけがすことになりました。

2001年夏休み中から、選抜甲子園へつながる秋の県大会の期間、部長(責任教師)の岩井尚龍先生が長期の出張となり、私が代役を務めることになりました。夏休み中の新潟での合宿、中毛リーグ、練習試合、そして秋の関東大会の県予選と、松本野球をベンチ内から、堪能できる幸運に恵まれたのです。

それまで私はスタンドの応援席から、保護者の方々や、生徒と一緒に応援・観戦するのが常でした。前高の勝利を祈りつつ、松本野球の楽しさ、面白さ、凄さにひかれ球場へ通いました。試合中、一つか二つ、ハットする作戦があり、これが楽しみでした。いわゆる「松本マジック」です。私の見た範囲で、その成功率は90%を超えていました。

応援席の一ファンから、ベンチ内で直接松本野球に接する機会を得た私です。秋の県大会では、対中之条・桐生・富岡・沼田の各高校戦をクリヤーして、準決勝は強豪桐生第一高校戦となりました。この一戦は、甲子園につながる関東大会出場権をかけた大事な試合です。秋の日暮

れは早く桐生市営球場が少し薄暗くなったころ、軟投のエース松下君から速球派の茂木君へスイッチし、8対7の接戦をものにしました。松本監督のさりげない投手交代にも、天候を考慮した計算があったのです。

関東大会出場権を得て桐生市営球場をあとにしたバスの中で、松本監督は携帯電話を使って、関東地区各県の県大会決勝の日程・会場の情報収集に取り掛かりました。学校に到着して、早速控え選手を中心に他県の決勝戦のビデオ取りの編成が行われました。翌日、決勝の対太田商業戦のさなか、千葉・埼玉・神奈川・茨城・栃木へとビデオ隊が向かいました。この段階で、松本監督は関東大会から甲子園出場をにらんだ、仕掛けに取り掛かっていたのです。

宇都宮を会場とする関東大会において、群馬県2位の前高は神奈川県1位の平塚学園を相手に1回戦へ臨みます。相手は本大会優勝候補の呼び声高い、右の剛速球投手を擁するチームです。ここで先手分けして収集したビデオ取りの分析がものを言うことになります。関東大会の宿舎で、夕食後の選手全員による相手チームの分析が行われ、その席でビデオから平塚のエース投手のけん制投球フォームのクセを見抜くことになるのです。

翌日、平塚学園戦、早い回に1塁に出た俊足ではない山崎君が、早速盗塁を成功させて、相手投手に揺さぶりをかけ、動揺を誘い、立ち直る機会を与えない攻

撃で、8対0のコールドゲームをもって2回戦へ進出を果たしました。

この勝利の背景にもう一つの「松本マジック」がありました。前日の公式会場での公開練習における仕掛けです。平塚学園は洗練された、強豪チームを印象づける練習を前高の選手の前で見せてくれました。代って前高の番です。ベンチ入りメンバーばかりか同行した全選手がグラブを持って守備に就き、2箇所からシートノックを受けるのです。あちら、こちらで白球がグラブを弾く、ポロポロの守備練習でした。スタンドで見学する平塚の選手は笑いながら、群馬県2位の「実力」を、この段階で「こんなものか」と認識したようです。実は、これが相手を油断させる仕掛けだったのです。試合当日、前日の練習光景の残像が平塚の選手の意識の中にあり、いつでも得点できるという姿勢がうかがえました。しかし、平塚はアンダースローの松下君の軟投にタイミングが合わず、凡打を繰り返し、得点を挙げることも出来ずに、終わってみれば8回コールド、前高の勝利となりました。

2回戦、対甲府工業との試合です。前高の攻撃中ランナー3塁で、バッター山田君のところで、松本監督は躊躇なくサインを出しました。トリックプレイです。企業秘密のため具体的にお示しできませんが、関東大会向けに前高のグラウンドで練習をやった作戦です。練習中不器用な山田君はタイミングが合わず、アドバイ

スを受けながら繰り返しやっていました。そして本番で見事に成功させ、3 塁走者のホームインを助きました。このプレイが決まった瞬間、ネット裏の観客席から「今のプレイは、何だったのだろう？」という声が上がります。私は「松本マジック」に酔いしれていました。こうして2 勝し、準決勝へ進出した前高は、目出度く 2002 年春の甲子園に選抜され、松本先生は、監督として2 度目の甲子園をつかみ取ったのです。

一本勝負、負けたら終わりの高校野球においては、監督の采配と選手の集中力が勝敗を分けるように思います。松本先生は、選手との確かな信頼関係の上に、普段の練習を踏まえ大会・試合に臨んでいました。2 時間前後のゲームに、多くの事前準備と練習に裏付けられた作戦・仕掛けを有効に結びつけ、目標を実現させました。

これが、私の見た「松本野球」「松本マジック」です。現役の高校野球監督のである松本先生の今後のご活躍を、一人の松本ファンとして期待してやみません。

(2009 年 5 月 5 日)

【感想文より】

幸運の人 松本稔先生

「一身にして二世を生きる」これは遠くは江戸と明治を生きた福沢諭吉が、近くは戦前の東大法学部と戦後の民主化の日本を生きた丸山真男がともに語ったことである。松本さんご自身が述べておられるように、前

高在校中に甲子園出場、完全試合を達成し(1978 年)その 24 年後の 2002 年、今度は母校の教員、監督として再び甲子園に。もう死んでもいいと思ったのは実感であろう。

彼の幸運の素(“味の素”みたいだが)は何だろうか? 完全試合に臨んだ際(17 歳のとき)、初めて甲子園球場に立ったとき、球場が小さく見えたという。これなら投げられると思ったそうだ。ストライクゾーンも広く取ってもらえたとも述べておられる。幸運の素はこの「リアリズム」にあると思う。

リアルに物を見て、知的に正直に事にあたること、これである。

これを「科学的」と表現してもいいが、又、人間の能力として精神的なものと身体的なものとの総合の仕方とも考えられる。

高校の教員として、春秋に富む若者たちの指導にこの“幸運の素”を是非生かして大きな成果をあげてもらいたいと切望する。

日本画家の竹久夢二は松本先生の甲子園にあたるような大きな挑戦(わが群馬県に美術研究所を作る)をしたが、関東大震災と結核によって夢半ばにして倒れた。

時代の流れというものがある。関東大震災に匹敵するほどの未曾有の経済危機下にある現在、揺れる高校教育の現場で幸運をバネとして更なる幸運を招き寄せることを祈る。

具体的には神技的な生徒指導である。特に、指導における民主主義の徹底。生徒の自主性・自主参加の尊重。先生自身の経験を生かした? 女子高生の指導改革(共学の実をあげること)ひいては学校全体、特に職員室の活性化を目指してもらいたい。(小川達彦)